

令和6年3月10日(日)

令和5年度大田原市歴史と観光シンポジウム事業「史跡ウォーク」

佐良土コース

大田原市佐良土、特に光丸山法輪寺を中心とする田宿・古宿・仲宿は、光丸山の門前町として発達しました。

本日は光丸山と宿を中心に佐良土を歩いてみたいと思います。今回歩くのは狭い範囲ですが、そんな中にも歴史が息づいていることを感じていただければと思います。

①光丸山法輪寺

地元の人たちからは「光丸山(こうまるさん)」と呼ばれ、親しまれている天台宗のお寺です。正式名称は正覚山実相院法輪寺といい、釈迦如来・大日如来を本尊とします。貞観2年(860)慈覚大師(円仁)の開基とされる古刹です。高さ2mを超える大天狗面や西行桜と名付けられたしだれ桜(いずれも市指定文化財)があるお寺としても知られています。

そして、法輪寺に付属して光丸山があります。光丸山は慈覚大師が法輪寺開基と共に、現在の奥の院に大日如来を勧請して御堂を建立し、光丸山と名付けたのが始まりと伝えられています。光丸山は初院・中の院・奥の院・大日堂から成りますが、一般には法輪寺も含めて光丸山と呼ばれています。

また、光丸山には3つの鳥居があったり、大祭では神輿の渡御が行われたりと神仏習合の名残をとどめています。

◆光丸山大祭◆

現在は12月の第2日曜日に行われています。以前は12月13日に、戦前は旧暦の11月1日から15日におよびました。寺院としては珍しく神輿の渡御が行われ、一番の見どころとなっています。神仏習合の名残を今にとどめている全国でも貴重な祭礼です。

この日は多くの出店が並び大変賑わいます。かつては、旧湯津上村内の小中学校は休みとなり、村内だけでなく各地から光丸山へ人々が詣で、サーカスもきたということです。

◆大天狗面【市指定文化財】◆

地元では、光丸山といえば大きな天狗のお面を思い浮かべる人は多いと思います。旧湯津上村のシンボルとして親しまれ、現在も「天狗王国湯津上」といわれています。

この大天狗面は高さ2.14m、幅1.5m、鼻の高さ1.3m、重さは1tの巨大なもので、天狗堂に安置されています。木製の天狗面としては日本一の大きさといわれ、明治13年(1880)に奉納されたものです。

明治時代のはじめ、武茂村（現在の那珂川町）に盗難や火災がたびたび発生し、当時の人々は天狗の仕業だと信じていました。そこで、災難を防ぐために大天狗面を奉納したということです。

◆西行桜【市指定文化財】◆

境内にあるシダレザクラで、別名イトザクラとも呼ばれます。

保延年間（1135～1141）、西行法師が奥州行脚の際、法輪寺に訪れ境内の桜を見て

盛りには などが若葉は今とても ころろひかるる糸桜かな

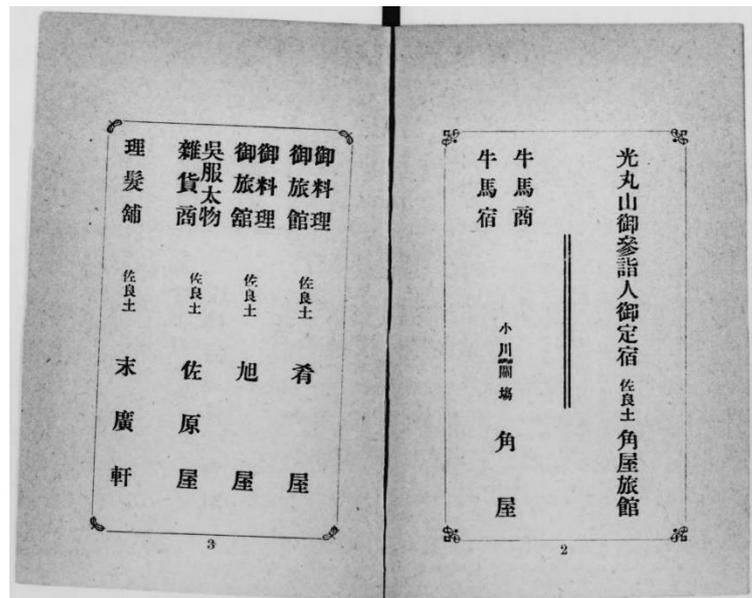
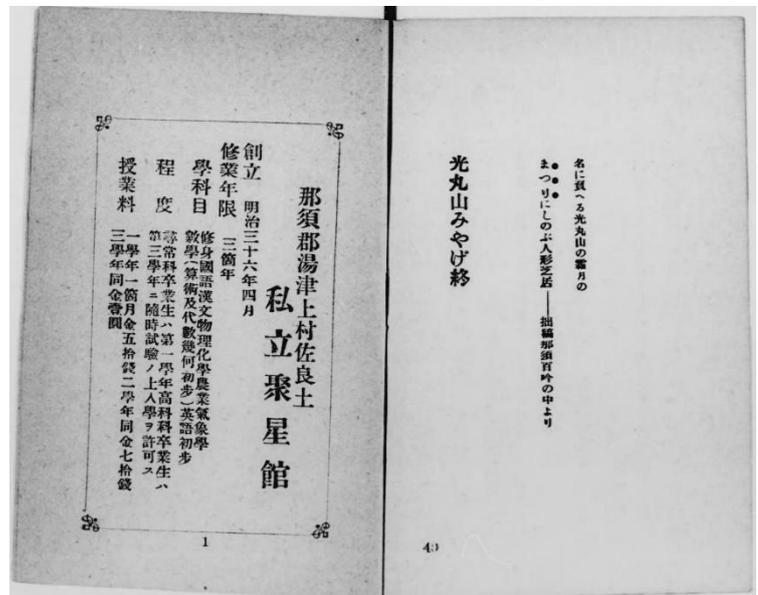
と詠んだと伝えられ、これが西行桜の名の由来となっています

しゅうせいかんしょうとくひ
聚星館頌徳碑

明治36年（1903）、当時の湯津上村に小学校以上の教育施設がないことを残念に思った地元の有志たちの要望を受け、野口藤作が開設したのが私立聚星館です。最初は光丸山法輪寺境内の付属施設を借りて開館しました。

後に大字佐良土の共有地を借り、明治41年（1908）には西原滝ノ御前に校舎を新築し移転します。また、村からも教材費などの補助を受けました。村内外から多くの生徒が集まり、卒業生は2,000人を超えたそうです。しかし、入学者数の減少や村からの補助もなくなったことから、昭和8年（1933）3月31日をもって閉館しました。

光丸山法輪寺境内にある頌徳碑は、昭和35年（1960）11月3日、門下生一同により、建立されたものです。



『光丸山みやげ』※

光丸山の由来や縁日の様子などを、野口藤作の長子であり歌人でもある野口青眉がまとめたもの。最後に聚星館や佐良土の商店などが記載されています。大正6年刊行。

②温泉神社

^{おおなむちのみこと}大己貴命、^{すくなひこなのみこと}少彦名命を祀ります。創建は^{しゅちよう}朱鳥元年（686）と伝えられています。

佐良土は那珂川と箒川の合流地であり、交通文化の中心として人々も多く集まり、崇敬も盛んであったといわれています。

現在、4月に春の祈年祭、10月に秋の例大祭、11月に^{けんこくさい}献穀祭が、氏子総代主催で行われています。

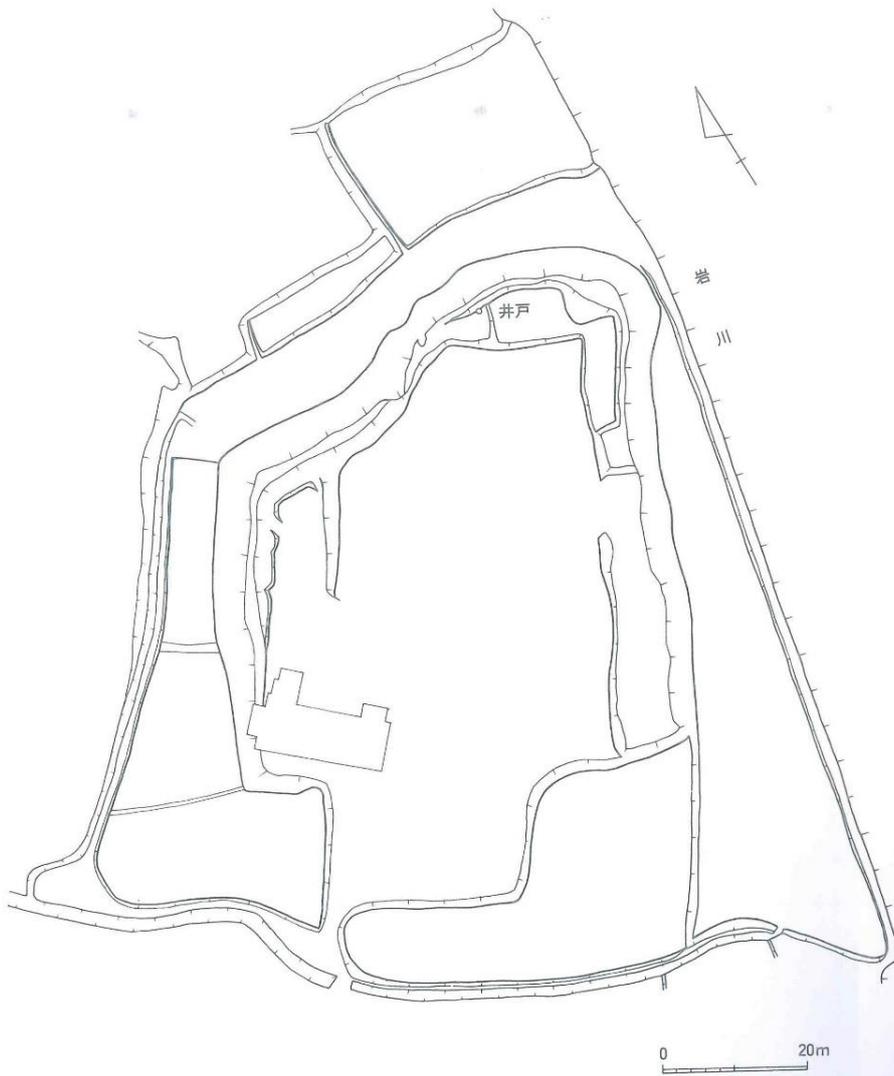
③佐良土上の原Ⅱ遺跡

【現地説明会資料参照】

④佐良土館跡

天正18年（1590）、烏山城主^{すけはる}那須資晴が豊臣秀吉の小田原攻めに参戦しなかったため、所領を没収され閉居していた館です。資晴が慶長15年（1610）に没したのに伴い、わずか20年で廃城となりました。資晴は大田原市^{ふくわら}福原の^{げんしょうじ}玄性寺に葬られたといわれますが、光丸山法輪寺にも資晴のものと伝えられる墓があります。

現在は畑や荒地となっていますが、南を除く三方に土塁が残されています。



佐良土館跡実測図

長谷川操・磯雅史・齋藤史
(1996)「佐良土館跡測量調査報告」『那須文化研究』
第10号

⑤ 諏訪神社

源平合戦の際、平家側について那須太郎光隆みつたか以下9人の兄弟と、源義経みなもとのよしつねの命に従わなかった十郎為隆ためたかは信州（長野県）に逃れました。そこで、諏訪大明神に帰国の願をかけたところ、大願成就し那須へ帰ることができました。そのため、それぞれが那須の各地に諏訪神社を勧請したと伝えられています。佐良土の諏訪神社は五郎之隆ゆきたかが勧請し、建立したといわれています。

諏訪神社は那須家代々に崇敬され、佐良土館の那須資晴は、祭祀料として毎年粃 50 俵を奉納しました。資晴没後、佐良土館は廃城となり、その子資景すけかげが福原に移ると、祭祀は氏子たちが行うようになったと伝えられます。

現在、8月に例祭が崇敬総代主催で行われています。かつては祭礼後、境内の土俵で子供相撲が奉納されていましたが、現在はコロナ禍の影響や子供たちが少なくなったことから休止しています。土俵の縄は、大捻縄引の縄が使われました。

だいもしひき 大捻縄引

大捻縄引は、佐良土の伝統行事であり、国選択無形民俗文化財でもあります。「盆綱引き」といわれる習俗のひとつで、田宿・古宿・仲宿の3地区が順番で当番を務めて行います。

8月14日、早朝から稲ワラで「ヒックビレ」といわれる小さなワラの束を作り、ヤグラを組んで、そこにかけて縄を捻り上げていきました。夜、佐良土宿内の道路上で、当番宿と残り2地区の対抗戦で大縄を引き合い、勝てばその地区は豊作・無病息災が約束されるといわれています。当地では、縄をな縛うことを「モジル」といい、大捻縄引の名称の由来となっています。

この行事の起源は定かではありませんが、一説には、永正17年(1520)8月、白河城主であった結城義永よしながが岩城下総守常隆つねたかの援軍を得て、那須福原城主の那須資房すけふさを攻めた時、両軍が湯津上の地を流れるほうきがわ箒川沿岸で戦い、白河勢は敗北。太い縄をより上げ箒川の崖に下げ、これによって敗走しよう計ります。那須勢はこれを見て、この縄を引き上げようとして両軍縄の引き合いとなりました。このことが、この行事の起源であると伝えられています。今なお、この箒川の崖周辺を、この故事にちなんでなわつりだい縄釣台と呼んでいます。

また、大捻縄引が始まった正確な年代については分かりませんが、大正13年(1924)、昭和5年(1930)の文献に記載されており、昭和38年(1963)の写真記録が残っています。その後、休止期間・数回の復活を経ましたが、令和2年以降、コロナ禍のため休止しています。

◇◇引用参考文献◇◇

- ・湯津上村誌編さん委員会（1979）『湯津上村誌』湯津上村
- ・長谷川操・磯雅史・齋藤史(1996)「佐良土館跡測量調査報告」『那須文化研究』第10号 pp22-30
- ・大田原市教育委員会文化振興課（2015）『大田原市の文化財』大田原市教育委員会
- ・株式会社 TEM 研究所（2020）『湯津上のダイモジ引き』文化庁文化財第一課民俗文化財部門

※野口青眉 編『光丸山みやげ』, 笹沼鶴造, 大正 6. 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/956450> (参照 2024-03-07)

メモ